

青年招へい事業
アフターケア調査チーム報告書
平成8年(1996年)度

JICA LIBRARY



J 1140474 (6)

平成9年3月

国際協力事業団

青 招

J R

97-19

青年招へい事業
アフターケア一調査チーム報告書
平成8年(1996年)度

平成9年3月

国際協力事業団



1140474 (6)

ブルネイ



ブルネイ液化天然ガス



同窓会主催 歓送会

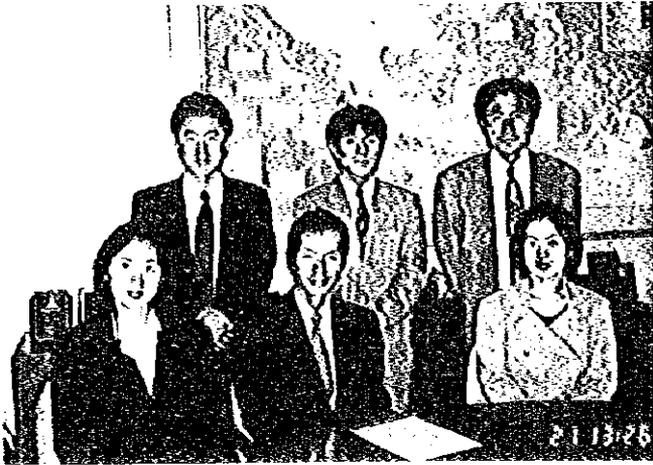


ブルネイTV



青年スポーツ省表敬

インドネシア



JICA事務所にて
諏訪所長と



インドネシア内閣官房にて



交流会にて
同窓会メンバーと

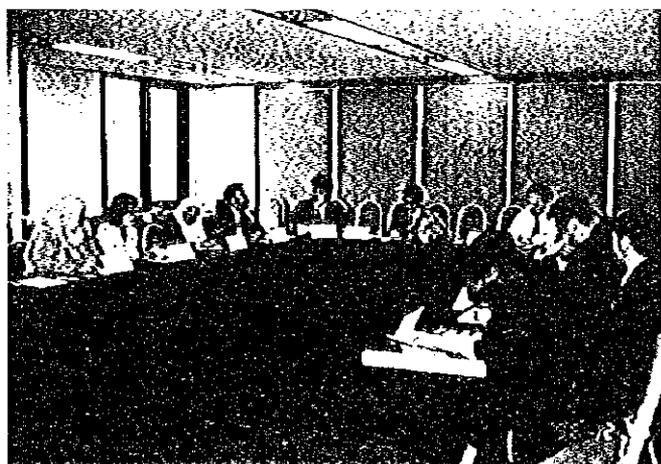


ボロブドゥール遺跡前で
ジョクジャカルタの同窓会メンバーと

マレーシア



マレーシア人事院にて



帰国青年活動現場 (PNB) にて



ホームステイ対面式会場前にて
ホストファミリーと



同窓会主催歓送会

フィリピン



帰国青年職場訪問



フィリピン外務省表敬訪問

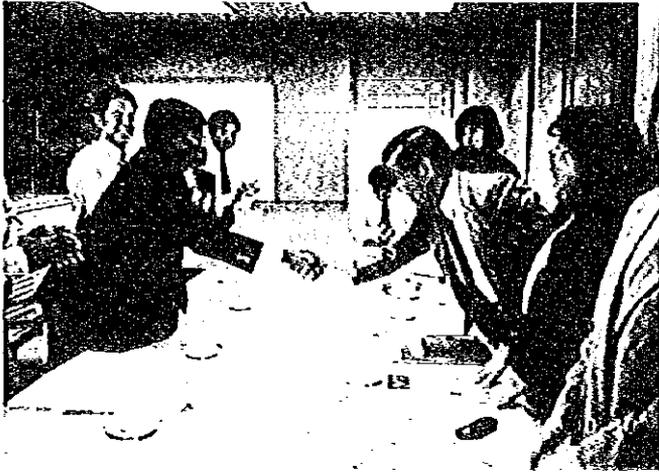


帰国青年の職場にて 意見交換会



同窓会との意見交換会

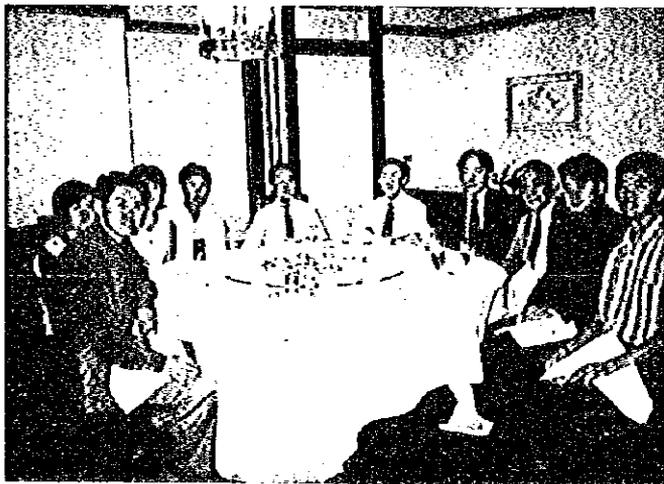
シンガポール



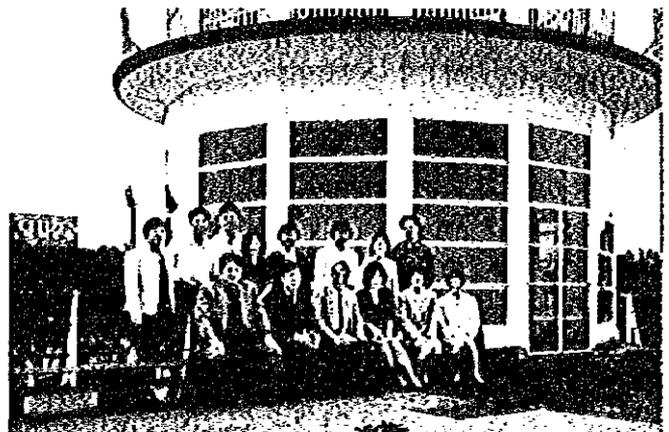
シンガポール外務省 ASEAN 局表敬訪問



シンガポール貿易開発庁にて



懇親会にて
JICA 岩田所長 同窓会メンバー 帰国青年と



人民協会にて
帰国青年と



帰国青年の職場見学



国立青年局訪問



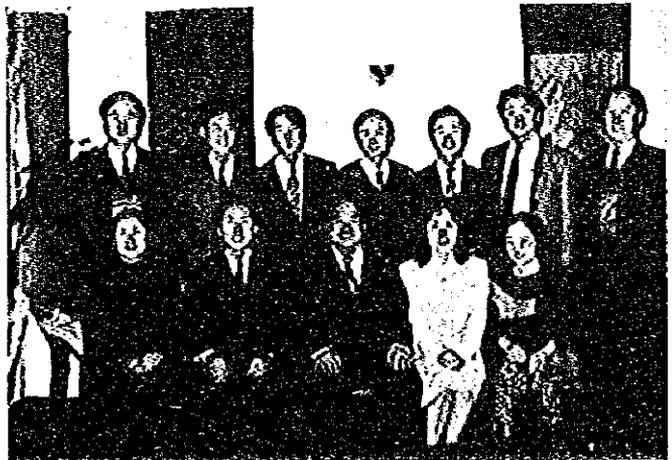
同窓会会長宅にて 朝食会



帰国青年の職場の学校にて
生徒たちと



「万里の長城」八達嶺にて



帰国青年たちとの交流会



青年の職場訪問 北京電視台



袁副主席 表敬訪問

目次

I. 概要報告	3
II. 国別報告	5
1. ブルネイ	7
2. インドネシア	21
3. マレーシア	43
4. フィリピン	59
5. シンガポール	81
6. タイ	97
7. 中国	117

[国別報告構成]

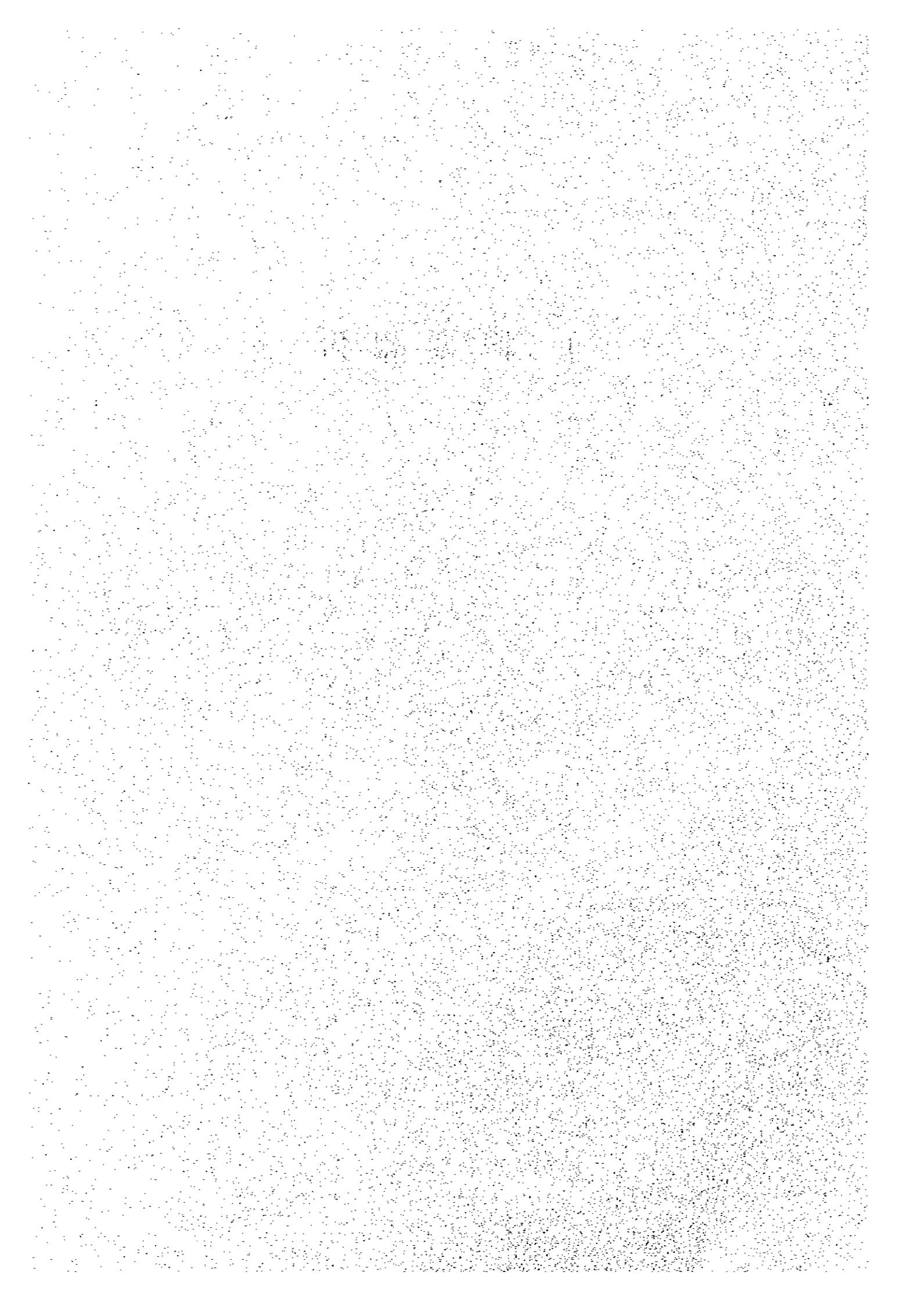
I. 調査目的

1. 調査目的
2. 調査内容
3. 調査団員

II. 調査結果

1. 日程
2. 主要面談者
3. 調査結果概要
4. 現地調査・活動内容結果
(表敬・訪問先における意見交換や聴取内容/帰国青年活動状況/セミナー・交流会/ホームステイ/その他)
5. 所感及び提言

I 概要報告



I. 概要報告

1. 目的

青年招へい事業において、わが国での交流プログラムに参加した日本人青年等を ASEAN 諸国等に派遣し、ASEAN 青年の本邦招へいをもって開始された本事業を双方向の交流に発展させ、本事業参加経験者の日本理解及び研修成果をさらに深め、再交流を促進し、来日時に形成された友情をより発展させ、永続的な友情関係を樹立することを目的とする。

2. 派遣対象者

分野別都内プログラム関係者、分野別地方プログラム関係者、共通プログラム関係者等「青年招へい事業」日本側関係者

3. 派遣国及びチーム編成

平成8年度は、ASEAN 6カ国及び中国に対し、1カ国につき1チーム、合計7チーム(34名)を派遣した。各チームは、チームリーダー1人とチームメンバーにより編成されている。

4. 派遣日程

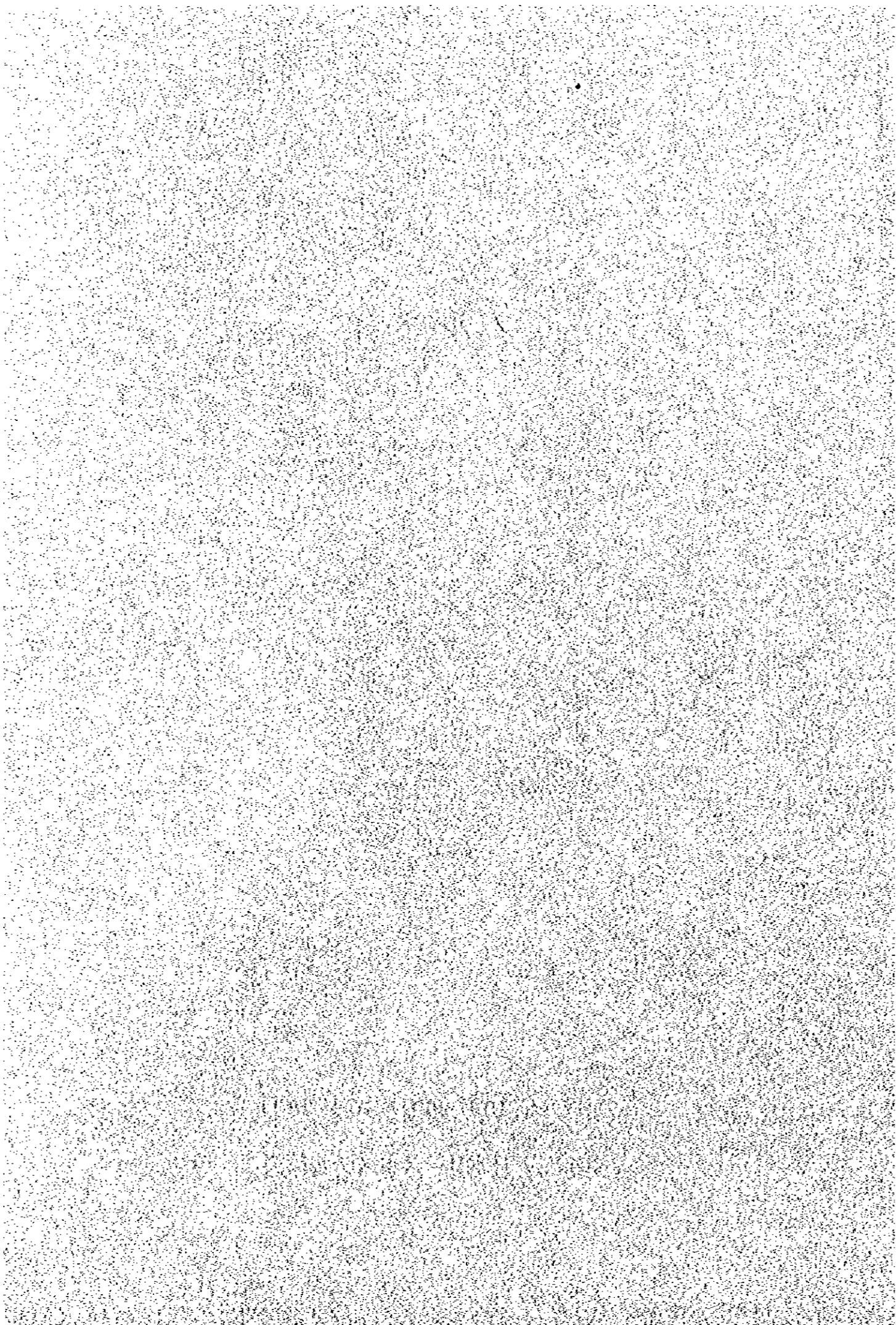
派遣国	実施協力団体	派遣期間
ブルネイ	財団法人 日本ユースホステル協会	平成8年10月20日～10月28日
インドネシア	社団法人 勤労厚生協会	平成8年11月13日～11月22日
マレーシア	社団法人 日本国際生活体験協会	平成8年12月10日～12月18日
フィリピン	財団法人 日本国際協力センター	平成9年1月8日～1月15日
シンガポール	財団法人 ユースワーカー能力開発協会	平成8年10月29日～11月4日
タイ	社団法人 国際交流サービス協会	平成9年1月13日～1月22日
中国	社団法人 青年海外協力協会	平成8年12月24日～12月31日

II 国別報告

ブルネイ

平成8年10月20日～10月28日

財団法人 日本ユースホステル協会



I. 調査目的

1. 調査目的

- ブルネイの実情を把握し、また帰国青年の活動現場を視察し意見交換を行い、今後の青年受け入れに役立てる。
- ホームステイを通して一般の家庭で実際の生活習慣・食事等を体験し、今後の来日青年の生活面でのケアの参考とする。
- 在ブルネイ日本大使館、JICAブルネイ事務所を訪問して、ブルネイの事情を把握し、アフターケア調査を円滑に進めるための参考とする。
- 青年招へい事業の窓口である文化青年スポーツ省を訪問して、職員と意見交換を行い、今後の招へい事業の改善に役立てる。

2. 調査内容

(1) 国際協力事業団 (Japan International Cooperation Agency : JICA) ブルネイ事務所訪問

ブルネイの事情、JICAの活動内容、青年招へい事業の運営状況等を調査する。

(2) ホームステイ

一般家庭に入り実際の生活を体験して、食事・生活習慣などに触れ、今後の受け入れの参考にする。

(3) 文化青年スポーツ省青年スポーツ局表敬

青年招へい事業の活動内容について意見交換し、要望事項を聴き取る。

(4) 帰国青年の活動現場

帰国青年の実際の職場で、青年招へい事業に参加して、どのように感じたか。また、日本での経験が今の職場でどのように活かされているのかを調査し、今後の参考とする。

3. 調査団員

	氏名	所属先	青年招へい事業との関わり
リーダー	真田 哲男	財団法人日本ユースホステル協会	分野別都内プログラム担当者
メンバー	平井 利幸	アムウェイ・ディストリビューター	分野別地方プログラム ホストファミリー
メンバー	杉原 知樹	元町保健所	分野別地方プログラム 来日青年との意見交換参加者
メンバー	狩野 和之	クレディ・リヨネ証券会社	分野別都内プログラム 合宿セミナー参加者

II. 調査結果

1. 日程

10月20日(日)

- 11:30 成田空港発 (JL719 便)
- 17:25 チャンギ国際空港着 (シンガポール)
- 19:30 ブルーバードホテル チェックイン

10月21日(月)

- 09:10 チャンギ国際空港発 (SQ182 便)
- 11:05 ブルネイ国際空港着
- 12:30 テラスホテル チェックイン
- 13:00 日程打ち合わせ
- 14:30 JICAブルネイ事務所訪問
- 15:30 日本大使館表敬訪問
- 16:30 ホテル帰着
- 19:00 ホテル出発
- 19:30 歓迎夕食会 (ハジダイブ氏邸)
- 22:00 ホテル帰着

10月22日(火)

- 08:45 ホテル出発
- 09:00 ヤヤサン・サルタン・ハジ・ハサナル・ボルギア・コンプレックス訪問、旧モスク見学
- 12:00 ホテル帰着
- 13:45 ホテル出発
- 14:30 文化青年スポーツ省・青年スポーツ局表敬訪問
- 17:30 ホテル帰着
- 19:00 ホテル出発
- 19:30 同窓会会長、事務総長と夕食会 (クラウン・プリンセスホテル)
- 22:30 ホテル帰着

10月23日(水)

- 08:15 ホテル出発
- 09:15 シナウト農業研修センター訪問
- 12:00 昼食
- 13:00 ホテル帰着
- 14:30 ホテル出発
- 14:45 マレーテクノロジー博物館見学

15:30 王室博物館見学
14:30 ホテル帰着
19:15 ホテル出発
19:30 帰国青年と歓迎夕食会 (ダムアンレストラン)
21:30 ホテル帰着

10月24日 (木)

07:30 ホテル出発
09:00 ブルネイ液化天然ガス施設訪問
12:00 広報部長、財務部長と昼食 (施設内のVIPルーム)
13:00 10億バーレル記念碑見学
15:30 ホテル帰着
16:30 ホストファミリーと対面
ホームステイ先へ

10月25日 (金)

終日 ホームステイ

10月26日 (土)

08:00 ホームステイ先よりホテルへ移動
08:45 ホテル出発
09:00 テレビ局訪問 (ラジオ・テレビジョン・ブルネイ)
09:30 ニュース番組に生放送出演
11:00 新モスク見学
12:30 昼食
13:30 ホテル帰着
14:15 ホテル出発
14:30 同窓会メンバーと討論会 (青少年センター)
16:00 ホテル帰着
19:00 ホテル出発
19:30 JICAブルネイ事務所主催歓送会 (クラウン・プリンセスホテル)
21:45 金山JICA所長宅訪問
23:00 ホテル帰着

10月27日 (日)

10:30 ホテル出発
12:15 ブルネイ国際空港発 (SQ181便)
14:10 チャンギ国際空港着 (シンガポール)
15:00 ホテルにて休憩 (ル・メディアン・チャンギホテル)
22:45 チャンギ国際空港発 (JL710便)

10月28日(月)

06:30 成田空港着

2. 主要面談者

(1) JICAブルネイ事務所

金山 昌功 所長

(2) 在ブルネイ日本大使館

河合 正男 大使

品田 智幸 二等書記官

(3) 文化青年スポーツ省青年スポーツ局(青年招へい窓口機関)

Mr. Abu Bakr Hj Moxsin 職員

(4) シナウト農業研修センター

Mr. Effandi Bin Lalloh 校長

(5) ブルネイ液化天然ガス

Mr. Shahbudin Hj Musa 財政部長

(6) 同窓会(Pertubuhan Alumni Abad K-21, Brunei Darussalam: PERTAB21)

Mr. Hj Mohd Taib Hj Osman 会長

Mr. Hj Nayan Hj Nordin 副会長

Mr. Hj Mohd Noor Bin Hj Salleh 事務総長

3. 調査結果概要

限られた時間で、訪問先や交流会などで多くの青年と会い、交流を深めることができた。また、ホームステイでは、ホストファミリーに温かく迎えられ、2日間ではあるが一般家庭の生活習慣を体験でき、今後の受け入れなどに役立てていきたい。

4. 現地調査・活動内容結果

(1) 表敬・訪問先における意見交換や聴取内容

イ、JICAブルネイ事務所

青年招へい事業には、毎年50人が参加しており、ブルネイの人口は26万人なので、他の招へい事業をあわせると、かなりの青年が何らかの事業に参加していることになる。したがって、青年を募集するのが難しく、年間の招へい人数を減らしたいとのことであった。

ロ. 在ブルネイ日本大使館

青年招へい事業について調査チームより説明した。また、観光に力を入れて日本人観光客を増やしていくことが、この国を知ってもらう一つの手段になるのではないかという話を聞いた。

ハ. 文化青年スポーツ省

政府機関 13 省の一省で、言語・文芸局、博物館局、歴史館、青年スポーツ局の 4 つに分かれている。青年招へい事業の窓口になっている青年スポーツ局は、青少年部と総務部に分かれており、青少年部は 6 課で、その下部には 82 の協会がある。

青少年部は、文化・社会福祉、経済、スポーツ・レクリエーション、スカウト、国際交流、地域活動などを行っている。このうち国際交流は、青年招へい事業、東南アジア青年の船、アジア太平洋子供会議、北海道アジア会議、ユースフォーラム、ジャンボリーに参加している。青年招へい事業には、過去 500 人の青年が参加している。

青年招へい事業に参加した青年の日本での関心は、ホームステイ、歴史的施設の見学が高いとのことである。

当事業の募集の仕方は、各省庁・各青少年団体に推薦してもらい、面接して決めているということである。問題点としては、東南アジア青年の船は年齢と独身者であることが条件となっているため入選は容易であるが、青年招へい事業では、特定分野に限られているためなかなか集まりにくいとのことであった。

二. シナウト農業研修センター

1976 年に設立され、資源産業省農業局の傘下であり、中心部ブルネイムアラ地区から車で 1 時間あまり南西へ行った、緑に囲まれた農村地帯にある。当研修センターは全寮制で、毎年 16~25 人が入学し、現在の生徒数は 100 人あまり。去年の応募者は 88 人だった。入学試験は、面接と筆記試験があり、将来農業分野において監督者になる人材を育て、技術を習得させることを目的としている。ここでは、トレーニングをするのみで、技術的な研究はしていない。卒業後は、半数以上が省庁に就職している。

研修センターは広大な敷地 (108 エーカー) を所有しており、現在 78 エーカーを使用中で、残りは開発中である。

招へい青年も日本にくる前に、現地プログラムの一環として一日研修を受けた。ブルネイでも国民の農業への関心が低くなってきており、将来が不安であると校長先生が話していた。

ホ. ブルネイ液化天然ガス

ブルネイ経済を担っている石油・液化天然ガスは、中心部から車で 1 時間半のセリア地区沿岸で採掘している。私たちは、広大な敷地にある液化天然ガスの施設を視察した。厳重なオートロック式の回転ドアを入り、タバコ、ライターを預けることになっており、火に対してはかなり気をつけているようだ。ここは、政府 50%、ブルネイ・シェル 25%、三菱商事 25% の出資で運営されている。年間 580 万トンのうち 95% の 554 万トンが、日本に輸出されている。このままのペースで掘り続けると、石油は約 30 年、天然ガスは約 40 年で底をつくと言われている。現在、沿岸沿いで新油田の採掘を進めている。政府は 5 カ

年計画の一つに石油・ガス産業の依存から脱却するため、石油・ガスの下請けの産業を含めた幅広い産業、振興を目指し、経済の多角化、及び優秀な人材を育成するため多くの資金を費やしているが、国民のあいだには依然として公務員指向が根強く残っているため、民間企業への敬遠がみられるということである。

へ. 同窓会 (PERTAB21)

同窓会のメンバーは、約 100 人である。

[活動内容]

- ・ 機関紙“Friendship News”の発行
- ・ 年1回の総会の実施
- ・ 青年招へい事業の現地オリエンテーション・プログラムの補助
- ・ アフターケアプログラムの実施
- ・ 孤児たちへの募金活動
- ・ 子供絵画・子供美人コンテストの実施
- ・ 同窓会活動の展覧会の開催 (ボルギア国王も招待された) など

今回のアフターケアでは、この同窓会の方々に大変お世話になった。ハジダイブ氏を中心に同窓会活動を活発に行っている印象を受けた。

(2) 交流会

イ. 同窓会との意見交換会

出席者：JICAブルネイ事務所員
調査チームメンバー
帰国青年
同窓会メンバー

青年たちからは多くの意見が出されたが、意見交換会の時間を1時間しかとっていなかったようで、あっという間に終わってしまった。閉会后、帰国青年と写真をみながら思い出話で盛り上がった。

ロ. 歓迎夕食会 (ハジダイブ氏邸)

出席者：金山JICA所長夫妻
井上JICA所員夫妻
ホウJICA所員
調査チームメンバー

まるでホテルにいるような感じさえする豪華な部屋に皆驚かされた。奥さんが作られた、ビュッフェスタイルのブルネイ料理が並び、たいへんおいしくいただいた。

時間の過ぎるのを忘れ、和やかに談笑して初日のプログラムを終えた。

ハ. 帰国青年との歓迎会 (ダムアンレストラン)

出席者：調査チームメンバー
帰国青年 10名

このレストランは、「スチームポット=魚介・野菜鍋」で有名な所でブルネイ国民、親

光客にも大人気のスポットである。鍋は大変おいしく塩味でさっぱりして日本人好みの味つけだった。青年たちと2週間ぶりの再会に、楽しいひとときを過ごし、交流を深めた。

二. 歓送会

出席者：JICAブルネイ事務所所員

調査チームメンバー

ホストファミリー

同窓会メンバー

残念ながら2人の団員のホストファミリーが見えず少し寂しい感じであったが、食事をしながらホームステイでの体験談など和やかに話し、最後の夜を楽しんだ。

(3) ホームステイ

氏名	ホスト氏名	ホスト職業・参加年度・家族構成
狩野 和之	Suhaili Bin Alas	会社員 平成8年度 妻・息子・娘
平井 利幸	Abd Rani Mohad	公務員 妻・娘2人・息子4人
杉原 智樹	Hj Mohd Noor Hj Salloh	公務員 妻・娘2人・息子1人
真田 哲男	Bostaman Hj Lamat	公務員 平成8年度 妻・息子

(4) その他

イ. ヤヤサン・サルタン・ハジ・ハサナル・ボルギア・コンプレックス

1996年7月にオープンしたこの施設は、商業用とショッピング用の共同ビルディングで構成された近代的な建物で、ここでは何でもそろってしまうほどの品揃えにこの国の豊かさを実感した。この施設は、王室による国民への社会貢献を目的に設立され、資金は全額王室が出資している。また、宗教・社会福祉・教育・地域開発などへ利益を分配している。ここから得られた収益は、教育の奨金の援助、障害者や貧困者への援助、近代水上住宅の建設、学校の建設などに使われ幅広く社会に貢献している。

ロ. ラジオ・テレビジョン・ブルネイ

ブルネイ唯一のテレビ局。今回のアフターケア・プログラムの目的など、10分ほどのインタビューを生放送で受けた。インタビューには同窓会会長のハジタイプ氏と調査チームからは私、真田が出演した。このような機会を与えられたことは、とても意義深いことである。この交流プログラムで一方的な交流でなく、実際日本から来てブルネイの国を視察していることを多くの人たちに知ってもらうことができたと思う。

5. 所感及び提言

(1) 団員所感

イ. 「アフターケアを終えて」

真田 哲男

私は、本年度の第9陣ブルネイ社会開発グループのプログラム担当として、アフターケアに参加することになった。

プログラムを担当したため、ブルネイの国について若干知っているつもりだが、その国がどこにあるのか、どういった国なのか知っている日本人は少ないであろう。出発前に情報を得ようと、ガイドブックを探したが「ブルネイ」のガイドブックは見当たらない。もしやと思い「マレーシア」のガイドブックを開いてみると、後ろのほうに3~4ページ載っているだけであった。今は、関西空港からダイレクトにこの国に入ることができるようになったが、観光で訪れる人はほとんどいないだろう。現に私たちの滞在中に観光している人には出会わなかった。

石油・天然ガスの産油国であるこの国は、財政的にも恵まれ、そのため教育費、税金、医療費など一切無料で国民は多くの恩恵を受けている。また、国民のほとんどが公務員であるという。驚いたことに、きれいに街中を整備している肉体労働者は、皆近隣の外国労働者であるということだ。タイやインドネシアなど他の東南アジア諸国から来て、この国で働き、家族のために稼いでいるのであろう。

今回帰国青年と再会できたことは、アフターケアにおいて意義深いものとなった。空港では、平日にもかかわらず数人の帰国青年が出迎えてくれ、翌日には歓迎会もあり、楽しいひとときを過ごすことができた。

ホームステイでは、帰国青年のポスタマンさんの家で2日間お世話になった。奥さんと4歳になる男の子がいる、普通の公務員の家庭である。4歳の「アイマン」が、英語を解さない私にとって、唯一のコミュニケーションの救いになった。もちろん、ポスタマンの家族、親戚の方々はとても温かく私を迎えてくれた。ほんの2日間の滞在中で、この国の生活習慣を垣間見ることができた。

そして、この青年招へい事業において一方通行でなく、相互理解を深め、友情を育むために、多くの日本青年がこの国を訪れることを望む。この事業は青年を受け入れて終わるのではなく、これから21世紀に向けての第一歩が踏み出されたに過ぎないのだから、私自身青年たちと交流を続けていつの日かまた会えることを夢見ていきたい。

ロ、「ブルネイで感じたこと、考えたこと」

杉原 知樹

日本人にとってブルネイは、ASEAN 諸国の中では最もなじみの少ない国だと思う。日本にいてブルネイのことを、ニュースにしろ何にしろ、耳にすることはほとんどない。それが、実際に訪問することにより、新たな認識を持つことができた。また、両国の人々が、互いを理解する第一歩として、まず相手のことを知ることが大切だと感じた。

今回の1週間の訪問の中で、一番印象に残ったのはホームステイである。実は、私は今までにホームステイも受け入れもしたことがなかったので、初めてのホームステイ体験だった。実際、2日間とはいえ、あまり言葉の通じない知らない人の家で過ごすことは、とても緊張することだった。しかし、私にとって貴重な体験となった。

私の英語力のなさのせいもあり、相手の言っていることはある程度は分かっているつもりでも、私の思っていることをなかなかうまく伝えることができなかった。そのため、ホストファミリーには、いらぬ誤解を与えたかもしれない。滞在中奥さんがなかなか顔を出さなかったのだが、これはイスラムの習慣によるものなのだろう。限られたコミュニケーションではあったが、ホストファミリーには小さい子供たちもいて、楽しく過ごすことができた。

ホームステイを含めて、私が感じたブルネイの人々の暮らしは、生活習慣以外の点では

(言い方を換えれば「文化」ではなく「文明」の面では)、日本人とほとんど変わらないもののように思われた。家の中では、衛星放送を始めとした電化製品に囲まれ、外では、ほとんどの自動車が日本車である。そして、彼らの顔立ちが日本人と似ていることもあり、ふと「日本にいるのでは」という感じになったりする。そのような中で、彼らと日本人で一番違うところは、生活の中の重要な部分に、イスラムの信仰があることだろう。自らのアイデンティティをイスラムに求めているのだろうが、街中のいたるところにアラブ文字が使われ、朝と夕方には、モスクからコーランがスピーカーで流されていた。これが日本と決定的に違うところだ。しかし、実際の印象はこの2つの言葉から連想されるアラブ諸国とはまったく違ったものである(ここで、私のアラブへの認識がどれだけ正しいかという問題はあるが)。それは、ブルネイは同じアジアの一員であり、そのことが私たちに親近感を与えてくれるからである。

ブルネイの未来を決定するものは何だろう。信頼は永遠に続くとしても、石油はいずれなくなってしまう。ブルネイが未来のためにしなければならないのは、石油がなくなった後も、安定した発展ができる国を作り上げることだ。そのために、私たちはできるだけ協力をしていきたいと思う。しかし、これは外部からの手助けだけで達成できることはない。まず、ブルネイの人々が自らの手で、現在の石油で得ている収入を、有効に将来につながるように活用していかなければならない。

ブルネイは、日本人にはあまり知られていない。しかし、石油による関係だけが重要なのではなく、人々の生活は日本人にとって身近に感じるものであり、もっとお互いに理解できるようになると思う。将来への可能性を持ったこの国が今後どのように発展していくか、楽しみにしたいと思う。

八、「再会から得たもの」

狩野 和之

平成8年10月9日、ホテルメトロポリタンで行われた第9陣歓送会。ブルネイ社会開発グループ16人と、「ブルネイで会いましょう」と固い握手をしてから12日後、私は彼らとの再会を期待してブルネイにやってきた。

到着日は月曜日。仕事で忙しいのにもかかわらず、その合間をぬって3人の友人が空港に私たちを迎えにきた。その晩には、別の2人の友人がホテルを訪ね、3日目の夜は、10人が集まり、歓迎の意を込めて私たちをレストランに招待してくれた。6日目の意見交換会には、12人もの人々が参加した。そしてブルネイを発つ日、空港には、3家族、そして2人の友人が見送りに来てくれた。ブルネイ社会開発グループ全員に温かく見守られた1週間であった。

私の場合、幸運なことがもう一つあった。ホームステイである。私のホームステイ先は、ブルネイ社会開発グループのリーダーであったスハイリさん。全く見知らぬ家庭でのホームステイではなかったので、不安や緊張感はなかった。スハイリさんとは、合宿セミナー期間中、残念ながら個人的なことまで深く話すことができなかった。今回のホームステイを非常に楽しみにしていた。日本での彼の印象は、非常に真面目で、潔白で、どこことなく近寄りたいたい感じがした。しかし、ブルネイでの彼は、仕事には厳しく、仕事を離れば、ごく自然で、明るくユーモアたっぷりの、家族を愛するやさしい人であった。私のように彼を誤解していた日本側青年も多かったと思う。特に彼の場合は、リーダーという立場上、日本で本来の自分を表現することが難しかったのかもしれない。彼とは、ブルネ

イの社会・経済状況から彼自身の生活まで、幅広く、深く、話をする事ができた。ホームステイを通じて、彼本来の姿を見ることができたような気がする。より一層、彼との信頼感、友情が深まったと確信している。彼に対してだけではない。今回、ブルネイで再び会うことができた、ブルネイ社会開発グループ全員と、日本にいたときよりももっと深い絆で結ばれたと思う。彼らのやさしさ、思いやり、温かさに触れ心が和む思いがした。この気持ちを今後も決して忘れることなく、大切にしていきたい。

アフターケア事業の目的の一つに、今まで片側通行的であった交流を、本来の意味での相互的交流にし、国民レベルでの一層深い信頼と友情を築くことが挙げられる。私は、今回の訪問を通じて、この目的を確かに達成することができたと信じている。今回の訪問がなかったら、これほど彼らのことを大切に思わなかったであろう。また、彼らも同じ気持ちであろう。私は、生涯、彼らとの友情、信頼関係を深めていくつもりである。さらに、私たち個人の友情が、日本とブルネイの国家レベルでのさらなる信頼関係の構築にも寄与することを願わずにいられない。

二、「異文化されど日本が見えた」

平井 利幸

私が東南アジアの小さな国、ブルネイについて知ったのはつい最近、まさにJICAのアフターケア調査チーム参加が決まり、ブルネイの青年をホームステイで受け入れてからのことである。以前から国名だけは耳にしていたが、はっきり言って何も知らなかった。この訪問を通して私は、日本とは文化を異にするイスラム教国家の人々ときずなを深め合う中に、逆にわが国日本を訪ねている思いがした。

さて、この国を訪れての第一印象は、なんだかアンバランスな部分が多いように思われたことだった。まずブルネイは小国なのに、国民所得が東南アジアでは香港やシンガポールと並んで最も高く、経済的に豊かな国であることだった。税金はなく、教育費、医療費もかからないと聞き、「地球上にこんなすごい国が存在したのか」と一瞬耳を疑った。さらに、河口にまばゆいばかりのモスクが建っているかと思えば、周辺にはトタンのさびついたカンボン水上集落が広がり対照的だったが、同集落には電気、水道が整い、中には衛星放送受信設備やクーラーを整えている家もあると聞き、外見とは違う実態を知って不思議な感じを覚えた。

ホームステイでは、ホストファミリーとともに、ブルネイ博物館やブルネイのディズニーランドともいえるジェルドンパークを訪れたほか、サッカーや折り紙をしながら、交流を深めた。私が滞在したラニさん一家は、夫婦に子供6人の家族構成でまことにぎやかで、ご主人は約10年前に青年招へい事業で来日していたこともあって、何かと私に気を使ってくれ、食事もおいしくいただいた。家族に少しでも溶け込むために、同じように手やマレイ特有のはしを使って食べたものの、食材が日本と似ているせいか、食事に問題は全くなかった。とはいえ、ふだんは男性が女性より先に食べる習慣や、モスクに正装して礼拝に行く姿を目の当たりにし、イスラム文化が根強く人々の生活に入り込んでいることを改めて感じた。

ところで、今回訪問したブルネイ・シエルでは、大規模なプラント、コンピューター制御された調整室などに示されるように、いずれも石油や液化天然ガス(LNG)の産出がこの国の最大の産業であることを自ずから印象つけた。さらに、日本はブルネイの石油輸出の約25%、LNG輸出の約95%を輸入しており、日本とブルネイが切っても切り離せない

経済関係にあることを学んだ。だが将来、ブルネイで石油やLNGが枯渇したらどうなるだろうか。同シェルでは、浪費は避けているとしながらも、石油やLNGに代わる新たな資源の開発に関しては歯切れが悪く、私には彼らが危機感を抱いているように見えなかった。

シナウト農業研修センターでも、今後は生徒を訓練することよりもむしろ、農場の改良やスタッフの再訓練に重点を置いていく計画で、若者にとって農業がほとんどビジネスにならず、関心の薄いことをうかがわせた。ブルネイ国民が一般の肉体労働はしたがらず、外国人出稼ぎ労働者に任せきりと聞き、まさに金満日本と同じ道を歩んでいるように感じた。

確かに、国民に危機意識は希薄なようだが、ブルネイ政府は観光産業に目を向けているという。入場無料のジェルドンパークは、外国人観光客を誘致する目玉にできるし、シンガポールのようなショッピング天国となりうる可能性も持っている。必要なのは観光客を受け入れるだけのインフラ整備と、イスラムに縛られない生活である。人々の気さくな態度、笑顔には日本人が習うべき点も多く、ゆったりとしたリズムは私たちをほっとさせてくれた。

今回のブルネイでの視察を通して、私は日本でホームステイの受け入れをしたとき以上に、ブルネイを好きになった。それは人々の心の温かさに触れたからであり、これこそが最も大切な国際交流であると思う。日本とブルネイの人的交流が今後も続くことを願っている。

(2) 提言

イ. 問題点

[アフターケアに関すること]

①訪問先での帰国青年についての情報がなかった。帰国青年の参加年度・招へい分野の情報が前もって得られればよかった。ホームステイ先も同様。

[帰国青年との討論会で出されたこと]

②合宿セミナーでの日本青年の参加意識が低くて、トピックスについて勉強不足が感じられる。

③現地プログラムで日本語学習が短くて、全体的にプログラムが詰まっているので期間を長くしてほしい。

④今後もこの事業を続けてほしい。

ロ. 問題点の原因または理由

①会う青年が事前に分かれば、名簿で確認でき、交流が深められた。また、ホストファミリーの家族構成があらかじめ分かれば、お土産などの配慮ができた。

②日本参加青年の応募数が少ないと、いろいろな関係先等へお願いして参加してもらわなければならないことも出てきて、事前研修会を実施することが難しくなる。

③せっかく日本語を勉強しても、時間が限られているので中途半端になってしまいホームステイ等でうまく活用できない。

④ブルネイはあと2年で青年招へい事業が終了してしまうため、今後もこのような交流事業を残してもらいたいとの意見があった。

ハ. 改善のための具体的方策

- ①こちら側から、訪問先へ早いうちにリクエストすることで改善されるものである。
- ②日本参加青年へ事前に資料などを配布して、周知徹底させる。
- ③期間が限られているので、仕方がない部分があると思うが、それぞれの国によって生活のリズムが異なるのでプログラムにゆとりを持たせる配慮が必要ではないか。
- ④年間の人数を縮小したり、費用を折半したりして実施してはどうか。

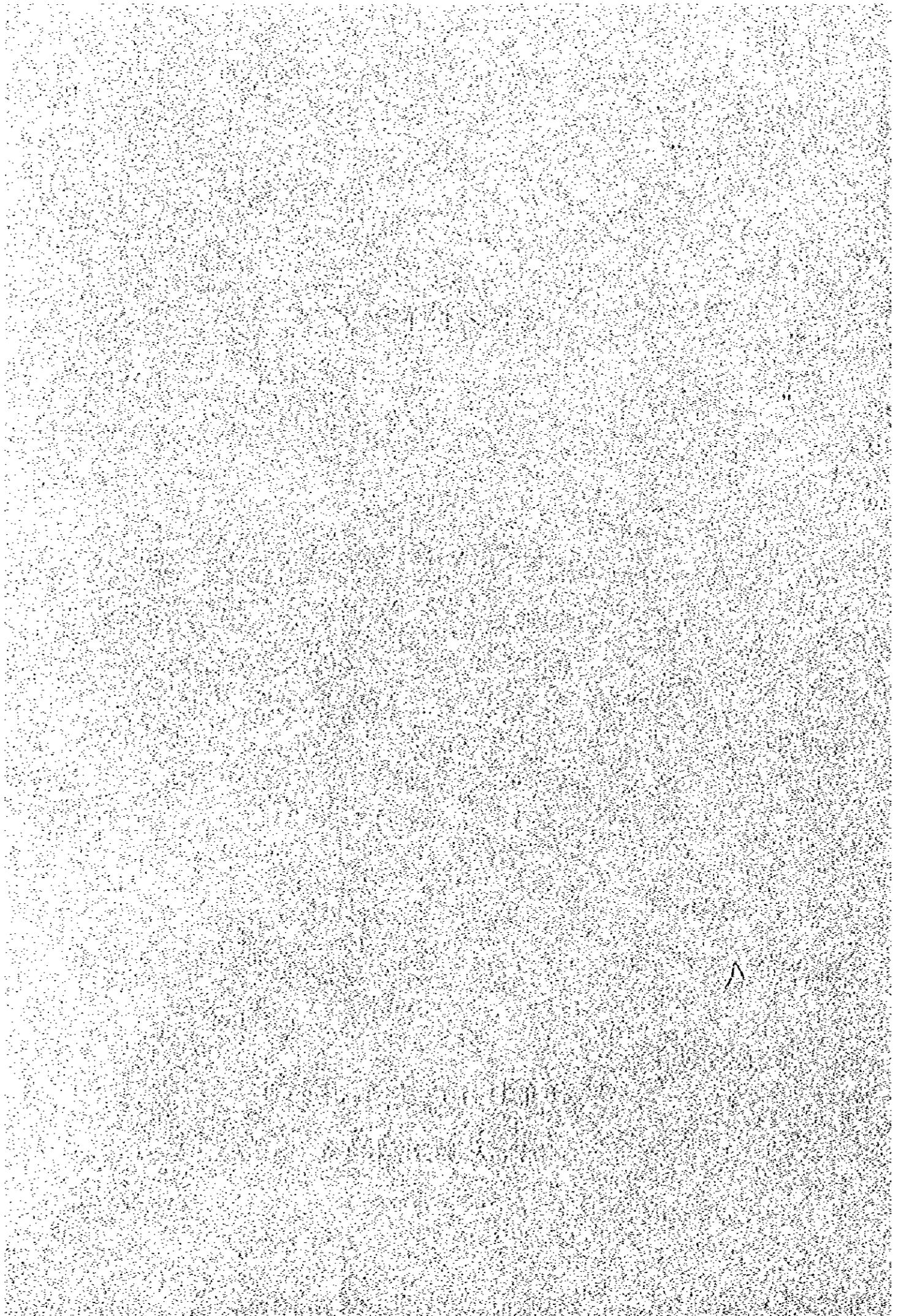
二. その他

- ①アフターケアの実施結果が、今後どのようにプログラムに活かされるのか。また、日本青年と帰国青年が、今後どのように交流を続けていくかを考えるべきである。
- ②JICAは各国の同窓会に補助金を出しているが、アフターケアの受け入れによる経費も全額補助すべきである。

インドネシア

平成8年11月13日～11月22日

社団法人 勤労厚生協会



I. 調査目的

1. 調査目的

- インドネシア側と、日本におけるプログラムに関し意見交換を行うことで青年招へい事業に対するより一層の周知と理解を促進し、あわせてプログラムの改善点のヒヤリングを行う。
- 帰国青年との再交流を通じて、日本・インドネシアの相互理解を増進し、インドネシア青年の来日時に形成された友情をより深い、永続的なものとする。
- 帰国青年の職場視察や交流会を通じて、青年たちの日本における研修成果・活躍状況を確認すると同時に、日本への関心を喚起する。

2. 調査内容

(1) 国際協力事業団(Japan International Cooperation Agency : JICA)インドネシア事務所訪問

- インドネシアの国情一般、JICAの青年招へい事業運営状況概要の聴き取り。
- 本調査の結果(概要)の報告。

(2) 在インドネシア共和国日本大使館表敬訪問

- 青年招へい事業全般、及び本アフターケア調査内容を周知し、本事業について理解を図ること。

(3) インドネシア共和国内閣官房技術協力局(State Minister of Cabinet Secretary, Bureau of Technical Cooperation : SEKKAB) 表敬訪問

- インドネシア共和国の青年招へい事業運営に関する意見交換、及び要望事項等の聴き取り。

(4) インドネシア共和国帰国青年連絡組織(同窓会組織 Keluarga Alumni Program Persahabatan Indonesia Jepang-Abad-21 : KAPPIJA) 訪問

- 活動状況聴き取り、青年招へい事業運営に関する意見交換、及び要望事項等の聴き取り。
- 本調査日程、及び各プログラムごとの目的を確認。

(5) 帰国青年との交流会、ディスカッション

- 青年のもつ対日観がどのようなものであるかを実感するとともに、それらがより深くより正確なものとなるように、日本理解を増進させること。

(6) ホームステイ

- インドネシアの一般家庭での生活を通じて同国の規範や価値観等に触れ、同国につい

てのより正確な理解を図ること。

- 異なる文化・宗教が共存し、相互尊重されていることに対する認識を深めること。

(7) 帰国青年活動現場訪問

- 帰国青年が滞日経験をどのように活かしているかを把握。
- インドネシアにおける帰国青年の活躍状況を確認し、青年招へい事業の成果を把握。

3. 調査団員

	氏名	所属先	青年招へい事業との関わり
リーダー	川上 幹夫	島根県大田市市役所 島根県国際交流青友会	分野別地方プログラム担当者
メンバー	齋藤 渉	日本電信電話株式会社	分野別都内プログラム 合宿セミナー参加者
メンバー	黒谷 幸世	しまね国際センター 島根県国際交流青友会	分野別地方プログラム担当者
メンバー	羽鳥 剛	財団法人日本国際協力センター	分野別都内プログラム 合宿セミナー参加者
メンバー	錦戸 和子	東芝ツーリスト株式会社	分野別都内プログラム 合宿セミナー参加者

II. 調査結果

1. 日 程

11月13日(水)

- 10:50 成田空港発 (JL725 便)
- 16:25 スカルノ・ハッタ (ジャカルタ) 国際空港着
- 18:00 プレジデントホテル チェックイン

11月14日(木)

- 09:15 ホテル出発
- 09:20 JICAインドネシア事務所訪問
- 11:00 日本大使館表敬訪問
- 12:00 昼食
- 15:00 インドネシア共和国帰国青年連絡組織(KAPPIJA)と打ち合わせ
- 17:30 ホテル帰着

11月15日(金)

- 08:30 ホテル出発

- 09:30 小学校見学
- 12:30 昼食
- 13:30 帰国青年活動現場視察（旅行代理店）
- 15:45 帰国青年活動現場視察（中学校・高校）
- 18:00 ホテル帰着
- 18:30 ホストファミリーと対面

11月16日（土）

- 終日 ホームステイ

11月17日（日）

- 終日 ホームステイ
- 18:00 ホテル帰着

11月18日（月）

- 09:30 ホテル出発
- 10:00 インドネシア共和国帰国青年連絡組織(KAPPIJA)幹部との意見交換
- 14:00 昼食
- 15:15 インドネシア共和国内閣官房技術協力局(SEKKAB)訪問
- 17:30 ホテル帰着
- 19:00 交流会1（プレジデントホテル）

11月19日（火）

- 07:30 ホテル出発
- 09:30 ジャカルタ発（GA 432）
- 10:35 ジョクジャカルタ到着
- 12:00 昼食
- 13:20 青年活動現場視察（Gadjah Mada 大学生協同組合）
- 18:00 ホテル帰着
- 19:30 ホテル出発
- 19:45 交流会2（レストラン）
- 22:30 ホテル着

11月20日（水）

- 07:30 ホテル出発
- 08:30 青年活動現場視察（教師再訓練学校）
- 11:30 昼食会
- 13:00 資料整理、自主研修
- 19:40 ジョクジャカルタ発(GA 441)
- 20:30 ジャカルタ空港着
- 21:40 ホテル帰着

11月21日(木)

09:30 ホテル出発

10:00 JICAインドネシア事務所へ調査結果報告

13:00 昼食

午後 自主研修、帰国準備

18:00 夕食

20:30 ホテル出発

23:45 スカルノ・ハッタ(ジャカルタ)国際空港発

11月22日(金)

08:15 成田空港着

2. 主要面談者

(1) JICAインドネシア事務所

諏訪 龍 所長

中垣 長陸 次長

佐々木 弘世 次長

川端 岳郎 所員

(2) 在インドネシア日本大使館

川村 泰久 参事官

樋田 幸浩 二等書記官

(3) インドネシア共和国内閣官房(SEKKAB)技術協力局

United Nation Programme Division 課長 Mr. Benny Hamid

TCDC & ASEAN Programme Division Ms. Rika Kiswardani

Mr. Tutang Sutandi

(4) インドネシア共和国帰国青年連絡組織(同窓会組織 KAPPIJA)

Mr. Zulfadli Barus 会長(昭和61年度勤労青年)

Mr. Rifeldo Meisa Arifin(平成7年度経済B)

Mr. Mansyur(平成元年度ASEAN混成教員)

Mr. Ronny Furqony(平成7年度経済B)

Ms. Christine Rumondang Batubara(平成7年度経済B)

Ms. Arise A. Danhi(平成2年度勤労青年)

[ジョクジャカルタ支部]

Mr. Defiyan Cori(平成6年度経済B)

Mr. Gatot Wibowo Hamiseno(平成8年度教育)

Ms. Sri Mulyati(平成7年度社会開発)

(5) 帰国青年活動現場視察

旅行代理店、中学校・高等学校経営者 Mrs. Ny. Titiek Nurul Soeharto

Gadjah Mada 大学 生活協同組合代表 Mr. Hermanto

手工芸・芸術系教員再教育施設校長 Mr. H. Imam Soepandji

手工芸・芸術系教員再教育施設職員 Ms. Kuntari Erimurti

(6) 教育現場視察

小学校校長 Mr. M. Siswaya

(7) 帰国青年との交流会

KAPPIJA メンバー

日本大使館職員

JICAインドネシア事務所所員

ホストファミリー

3. 調査結果概要

日本大使館、およびインドネシア共和国内閣官房を訪問し、各組織に本青年交流事業の活動内容・趣旨等を報告。青年招へい事業についての理解を促進するとともに、私たち自身も本事業の重要性を再認識することができた。この面談を通じて、本事業の発展・改善のためには、日本・インドネシアの相互理解が必要であることを痛感した。

帰国青年の活動現場等の視察は、私たちが本事業を理解するうえでの貴重な経験となった。帰国青年のうちには、日本で得た知識やヒューマンネットワークを直接的に活用している者も多い。意見交換等を通じて、帰国青年は概して日本に好意を持っている様子も察せられた。本事業は、こうした将来インドネシアで核となる人材の受け入れを行っており、現在の円満な状況に満足することなく、更なる相互理解の促進、交流・友情の発展に向けて、努力していかなければならない。

そのほかホームステイ、あるいは正規のプログラム以外からも、高度経済成長期の歪みや、物事に頼着しない国民気質など、インドネシアという国に直接触れることで、当国の理解が促進できた。理解の促進に伴い、当国への親近感が深まるとともに、日本がアジアの一員であることを体感できたのは素晴らしい体験であった。

9泊10日という短い期間でもあり、意見・要望等の聴取、検討が十分にできない部分もあると思われる。しかし、各組織・各青年等との交流を通じて、本アフターケア調査の必要性を実感したことを最後に述べておく。

4. 現地調査・活動内容結果

(1) 表敬・訪問先における意見交換や聴取内容

イ. JICAインドネシア事務所

諏訪所長の話の概要は、次のとおりである。

① KAPPIJA からの改善点・要望等に対する回答

青年たちは、自分が選ばれた者だという意識が強く、名誉なことだと思っている。そのため目的意識が強い。招へい分野に関するプログラムを増やしてほしいという意見もあるが、日本側が彼らの希望をまとめるということは困難である。実際のところ、関心分野を深めることだけがこの事業の目的ではないので、受入側の改善努力は必要ではあるが、できないことはできないと考えるようにしたほうがよい。

インドネシアの特殊性もあり、KAPPIJA の組織は他の国の同窓会組織に比べて組織率がもともと低い。

② インドネシア人に対する所感

インドネシア人の考え方の根底にあるのは宗教であり、これを精神のよりどころとしている。そのため、無宗教というのは、精神のよりどころを持たないことであり、考えられないことである。また、抽象的だが、人間の根源に関わらないことに関してはあまり執着心がなく、それがインドネシア人はのんびりしていると言われる所以かもしれない。宗教に関しても国民の90%がイスラム教徒とはいえ、その信仰は複雑で、昔からの土着の宗教とイスラム教が混ざり合っていることもその原因の一つである。

ロ. 在インドネシア日本大使館

地方でのホームステイを中心とした受け入れの感想、合宿セミナーでの感想を述べた。意見交換の主な点は、次のとおり。

① トイレ等の生活習慣

ホストファミリーが一番気にかけているのはトイレの問題で、インドネシアの習慣が紙を使わず手を使うということである。本当のところ青年がどのようにトイレを使ったか、誰も尋ねた者はいなかったようだが、使用に関して特に問題は起こらなかった。

② 宗教について

宗教に関して一番問題となることの一つに、お祈りがある。お祈りの時間および場所を設定するようにとの要望が多く、特にイスラム教で重要な日である金曜日にはお祈りの時間を設けてほしいと、青年から要望が出た旨を伝えた。

③ 参事官の話で印象に残ったこと

- 帰国した青年の全員が日本についていい印象を持って帰ったとは限らない。それぞれのホームステイ等の経験はかなり多様であり、具体的な内容は分からないが心理的ショックを受けた人もいたということである。ホームステイ先の選考も慎重にするべきであろうか（これにはいろいろな困難がある）。
- 青年たちは厳しい選考を経てはいるが、超エリートばかりというわけではない。しかし、全体的には目的意識が高く、積極的な青年が多いとのことである。

ハ. インドネシア共和国帰国青年連絡組織（同窓会組織 KAPPIJA）

KAPPIJA との会合（セミナー）のテーマは以下のとおり。

① KAPPIJA の活動内容

- ・ 生け花講習会等国際交流、文化体験
- ・ エッセイコンクールの主催（留学生から見たインドネシア）
- ・ ユースキャンプの実施 など

② 日本でのプログラムについて KAPPIJA のメンバーからの感想及び改善要望

初めての来日で青年の期待が大きく、また事前に日本側に彼らの要望が届きにくいため、いろいろな不満が生じるようだ。（彼らの意見の一部は提言参照）

③ KAPPIJA のメンバーが日本での経験をどのように活かしているか

日本での経験を直接何かに活かしているという例は挙げられなかったが、KAPPIJA のネットワークを通していろいろな活動、特に経済活動を行っていることを知った。

二. インドネシア共和国内閣官房技術協力局（SEKKAB）

面談者：Mr. Benny Hamid

Ms. Rika Kiswardani

Mr. Tutang Sutandi

三氏とも当事業で来日経験があり KAPPIJA のメンバーで、訪日時の印象、今後のプログラムに対する期待を話した。私たちからは、KAPPIJA との話し合いの中で話題になった事項を告げた。

また、現在、募集からプログラムの実施までの期間が短いため青年の要望を取りまとめることが難しい。これを解決するために募集時期を早めてほしいというのが SEKKAB からの希望であった。

(2) 帰国青年活動状況

イ. 訪問先：中学校、高等学校（中高一貫教育型）

面談者：Mrs. Ny. Titiiek Nurul Soeharto（帰国青年：以下、ティティイー氏）

ティティイー氏は旅行代理店を営んでいるかたわら、幼稚園をはじめ、小学校、中学校、高等学校も営んでいる。彼女いわく、旅行代理店は 100% ビジネスで、幼稚園等はひとつのボランティア的なものであるという。しかし、ボランティアと言っても、学校経営にもかなり力を入れている。青年招へい事業で来日した際、実際に日本の教育現場を見て自分の学校の参考としているとのことである。日本の教育システムをぜひ採用したかったということであったが、国の制約もあり、なかなか難しいところもあると言っていた。

校長先生の話では、この学校は、自立できることを目的に子供たちを教育しており、宗教、モラルについて特に力を入れている、とのことであった。

学校内では、日本の教育現場を見て取り入れたものか否かは聞き漏らしたが、LL 教室や、やや機種は古いがコンピューター教室などの設備がそろっていた。これらの設備は約 10 年前に整えたとのことであったが、10 年前といえば日本でもやっとコンピューター教室が出始めた頃で、ましてインドネシアではかなり進んだ学校ではなかったのか、と思量された。

- ・ 校長からの説明及び懇談会

- ・校内見学 [LL教室、コンピューター室、自習室 (エアコン付き)、モスク、教室、職員室]

ロ. 訪問先：Pusat Pengembangan Penataran Guru Kesenian (PPPG)

面談者：Mr. Gatot (帰国青年)

PPPG は美術や工芸などの教師を教育する NGO 団体の学校で、まずは説明を同校の校長先生からしてもらった。話によると、授業内容は木工、陶芸、絵画、銀細工、パティック染め (インドネシア独特のもので、蠟と樹皮とを混ぜ合わせたもので布に模様を書き、染料にひたしてから、その蠟などを取り去って作られるもの)、舞踊、西洋音楽、伝統音楽 (ガムランなど) など、非常に多岐にわたっているとのことであった。生徒はすべて美術や工芸の教師で、インドネシアのみならず、他の国からも来ているとのことであった。説明のあと、実際に校内を見学した。

- ・校長挨拶及び学校概要説明
- ・キャンパス視察 [ハンドメイドの木製クラフト、NC で制作した木製クラフト、パティック、金・銀製品、絵画、マルチメディア (撮影スタジオ・編集ルーム・コンピューターグラフィック作成)、ダンス、伝統音楽、西洋音楽、野外劇場]

(3) 交流会

イ. 交流会1 歓迎レセプション

日 時：平成8年11月18日(月) 19:00～

場 所：ジャカルタ プレジデントホテル

出席者：調査団 川上 幹夫、齋藤 渉、黒谷 幸世、羽鳥 剛、錦戸 和子

JICAインドネシア事務所 中垣 長睦 次長、川端 岳郎 所員

日本大使館 川村 恭久 参事官、樋田 幸浩 二等書記官

KAPPIJA メンバー (ジャカルタ)

前日・前々日の日程はホームステイであり、団員5人全員がお世話になったホストファミリーとも1日ぶりで再会できた。また、KAPPIJA の役員はもちろんのこと、多くの帰国青年が出席してくれた。本調査中、最も多くのインドネシア青年と触れ合うことができた場であった。初めて会う青年もいたが、皆と気さくに声をかけ合うことができた。ミス・ジャカルタも来てくれていたことを忘れずに明記しておこう (彼女も平成7年度経済Bグループで来日した帰国青年の一人である)。

パフォーマンスとして私たちは、耳からの輪ゴムで5円玉を鼻に押し当てるという「伝統的な」いでたちで、団長を筆頭にして、安来節を披露。そのあとで歌った「心の友」。インドネシア青年が加わり、大合唱となったことは今でも心に残っている。

インドネシア帰国青年のみならず、日本大使館の方をはじめ、多くの日本人関係者も、このレセプションに来てくださった。このことも、交流活動の一つの成果であると考えられる。

ロ. 交流会2 夕食会 (ジョクジャカルタ)

日 時：平成8年11月19日(火)

出席者：調査団 川上 幹夫、齋藤 渉、黒谷 幸世、羽鳥 剛、錦戸 和子

JICAインドネシア事務所 川端 岳郎 所員

青年 Mr. Defiyani Cori (KAPPIJA)

Mr. Gatot Wibowo Hamiseno (KAPPIJA)

Ms. Sri Mulyati (KAPPIJA)

Ms. Kuntari Erimurti (PPPG)

ジョクジャカルタ市内のホテルにある屋外レストランにて、会食した。当日視察した Gadjah Mada 大学や、翌日の訪問予定先である教員再教育施設(PPPG)についての説明を受けた。また、ジョクジャカルタにおける KAPPIJA の活動などについても聞くことができた。

全体として、和気あいあいとした雰囲気の良い夕べであった。

(4) ホームステイ

氏名	ホスト氏名	ホスト職業・参加年度・家族構成
川上 幹夫	Shanti Eriyani	教師 平成8年度 夫・娘
齋藤 渉	Fitri Andayani	教師 平成7年度 母・姉夫婦・姪
黒谷 幸世	Zulchaibar	保険会社勤務 妻・娘1人・息子2人
羽鳥 剛	Nora Parzileta	保険会社勤務 平成8年度 夫・息子・娘
錦戸 和子	Mustafa Ashari	保険会社勤務 妻・息子3人・娘1人

(5) その他

イ. 小学校訪問

ホテルのあるタムリン通りから車で約40分ほど行ったところにあるパンチョラン第一小学校を訪問した。KAPPIJAからの説明では、通常の授業風景を見ることになっていたが、着いてみると校庭にはテントつきの椅子とテーブル、おまけにフルーツや飲み物、インドネシア独特のお菓子が用意されていて、校長先生、父兄代表、文部省関係者の挨拶のあと、生徒たちによるエンダン（インドネシアやマレーシアでよく見られる集団での踊り）や空手の練習、マーチングバンドなど、盛りだくさんの出し物により大歓迎された。空手の練習の中では団員の一人である羽鳥が空手をやっているということで、急きょ組手（練習試合）の審判をやることになるというハプニングもあった。出し物のあとはいくつかの教室を見て回った。

小学校訪問は、帰国青年の活動現場ではなく、アフターケアとしてのプログラムとは少し趣旨が異なるかもしれないが、国家・人民の基礎となる教育の最前線を目の当たりにできたことはインドネシア理解という点では大いに効果があった、と思慮される。

【訪問プログラム概要】

- ・ 校長 Mr. M.Siswaya 挨拶
- ・ 父兄代表挨拶、文部省関係者挨拶
- ・ 踊り、空手、ボーイスカウト&ガールスカウトのドラマ
- ・ 調査チームのスピーチ
- ・ マーチングバンド演奏
- ・ 授業風景見学
- ・ プレゼント交換

5. 所感及び提言

(1) 調査団所感

「バグース“心の友”」

期待と不安でいっぱいだったホームステイも終わり、インドネシアに少しずつ溶け込むごとに無意識にそれぞれの口から出てきたフレーズ、“バグース”（素晴らしい）。ジャカルタでの交流会で初めて人前で歌い、その後、みんなで車の中などで歌いながらしみじみとインドネシアを満喫した歌、“心の友”（五輪真弓の歌でインドネシアで有名な歌）。実り多かった派遣のよき思い出の、この二つのフレーズを組み合わせたものが今回のアフターケアチームが帰国後早々につけたチーム名（ニックネーム）だ。

この名前（歌）はチームのシンボルネームとして、この歌を口ずさむたびに、インドネシアでの素晴らしい出会いと交歓を思い出し、今後の私たちの国際交流の支えになってくれるものと信じている。

今回の派遣で気がついたことを3点記述したいと思う。

最初に、高層ビルが立ち並ぶメインストリート街から少し路地に入ると不規則に南国の樹木が至る所に原生している中に、人が地方から寄り集まっている街、また唯一ホームステイを経験した街、首都のジャカルタ。時が穏やかにゆらぎながら過ぎて行く、田園と歴史の街ジョグジャカルタ。この二つの訪問地の人の静と動、経済と歴史等の“違い”に、コンピネーションの良さを感じた。

二番目に、たくさんの帰国青年と出会い語らい、そしてホストファミリーに温かく迎えられインドネシアを肌で体感することにより、インドネシアの方々の奥深い愛情と友情の深さを切に感じインドネシアが一層近く、そして同じアジアの一員としての一体感を感じた。

三番目に、青年及び政府機関からこの事業の素晴らしさを直に聞き、“招へい事業”の必要性を感じるとともに、招へい国を理解することこそ、日本でのより良いプログラムにつながることを感じ、アフターケアの必要性を痛切に感じた。

この報告書が、今後“青年招へい事業”を実施するうえでの参考となることを望むとともに、今後私たちがこの青年たちとのつながりをさらに広げていくことで、両国の友情が、より深くなると信じている。

インドネシアそして関係者のみんなに

サンバイブルジュンバ ラギ（また、会いましょう）

(2) 団員所感

イ. 「人は風となる」

川上 幹夫

96年6月13日、インドネシア経済Bの評価会で、代表のヤスミンさんから「大田での思い出は一生忘れない！ありがとう！」と言われ、2月からの段取りなどが走馬灯のようにめぐりめぐって熱いものが急激に胸にこみあげ、挨拶の言葉に詰まった。みんなをみると、ぼやけながら何人かの目から涙が伝わり落ちようとしているのが分かった。次の日

成田で今回のメンバーの黒谷さんと青年を見送る際、ヌルマさんはじめ他のメンバーからも「今度（アフターケアで）インドネシア来ますか？」と聞かれ、まだアフターケアのメンバーは決まってないのに、強い希望的観測で「Yes」と言ってからあっという間に5カ月が過ぎ、私と黒谷さんは約束通りジャカルタの空港に着いた。そして、その日の夕方、ヌルマさんとアリさんとの念願の再会がなかった。

いままでに不思議に思っていたことは、地方プログラムで青年を受けた際、いつも青年たち（特に東南アジアのイスラム圏の方）が、バスの中で大変楽しそうに歌い、会話が弾んでいることや、パーティーなどでも、酒を飲んでいる日本人よりはるかに楽しそうにリラックスしていることであった。その答えが短い期間ながらも、直にインドネシアに触れ、現地の方と交流を通じて、友達や家族（ホストファミリー）がたくさんできたことで、なんとなく分かったような気がする。「必要のない飾りはめぐり捨ててリラックスすること」の気持ちよさと、「人と人との交流の素晴らしさ」を肌で感じ、自分を振り返ることができた貴重な派遣でもあった。

さて到着早々に気がついたことは、日本に比べると時間に大変ルーズであること。KAPPIJA（帰国青年同窓会）とのセミナーでもこちらは時間厳守で来ているのに、予定の時刻になっても誰一人来ていないありさま。青年とホテルで待ち合わせしてもまず予定時間には姿が見えない。道路が渋滞しているなどの他の理由になってしまうらしい。しかし、慣れてくると時間に縛られないことがかえってこちら気持ちがいいから不思議である。

ジャカルタに到着して3日目、いよいよホームステイが始まる。家族とともに過ごすホームステイを経験するのは今回が初めて。ただ、今までホストファミリーをしたり、ホームステイを斡旋などしていたので、そう心配はせずにリラックスしていたが…。

夕方暗くなってから KAPPIJA のアリフさんの案内でホストファミリー宅へ着く。家族の方が出迎えてくれほっとし、案内されるまま中に入る。いよいよ始まったと思う。

早々にお土産を渡し、家族の写真などを見せてもらってから、幾分緊張しながら夕食をご馳走になる。時々怪訝そうな顔してこちらを見ていた一人娘のリサ（2歳）が、突然泣き出し、母親のサンティさんが食堂の外に連れて行ってしまふ。また食後、中庭のテラスでご主人のザンドラヒサさんとジャワティーを飲みながら、慣れない英語で会話をしていると、近くにいたリサがまたしても急に泣き出してしまった。床に就く前に、「このまま最後までリサが私になつかなかつたら…」と不安がよぎる。

次の日は早朝6時に起床。マンディ（水浴）をしてから玄関前のテラス（ポーチ）の椅子に座り、淡い水色の空と連なる赤茶けた屋根、そこから飛び出しているヤシの木をポンヤリと見ながら鶏などの鳴き声と人の行き交いをバックミュージックにジャワティーをいただく。こんなにゆったりとした気分になったのは久しぶりと感慨にふける。

しばらくすると、リサも起きて来て、隣に座っているザンドラヒサの元へ行く。今日は朝から機嫌がいい。時折、笑い顔がのぞく。昨日の心配が杞憂であったことに一安心する。そして、この頃から英会話も、単語の羅列ながら、思うようにできるようになった。不思議なものである。いつから体裁を気にして、得意だったジェスチャー入りの英会話をしなくなったのか。

夜、日本から持ってきたビデオカメラで、リサの茶目っ気たっぷりのインドネシアダンスを撮影する。そして、我が家の紹介のビデオを全員で楽しく鑑賞している時、ザンドラヒサがふといなくなり、しばらくして気がつくと隣の部屋でお祈りをしていた。夜の9時

前にはみんな部屋に入り寝てしまう。私は、なにが取り残されたようで少し寂しさを感じた。

ホームステイ3日目の朝、日本から持って来たそばを、サンティと共につくる。今まで食事はミルクしか飲んでいなかったリサが、そばを「スカ、スカ（おいしい、おいしい）」と言って食べていた。

昼は、ザンドラヒサと一緒に市内観光。途中、突然スクールにおそわれ、大勢の人がすでに雨宿りしているビルの軒先に避難する。雨合羽姿の自分がおかしくなり、笑い合いながら雨宿りした時間など、思い出深いジャランジャラン（散歩）となった。

こうして2泊3日の短いホームステイが終わった。私に大変気を使い、心温かく接していただいたことと、そしてここでは私がなにかと不案内で、自分でできることが制限されたためか、ファミリーの中で私が一番年長であるにもかかわらず、ザンドラヒサやサンティが頼もしく見え、最後には私の両親であるかのような錯覚を感じた。

また、インドネシアに来る前はあわただしく仕事に追われ、そしてアフターケアのプログラムをこなしていた中で、今回のホームステイは朝早くからいろいろしているのにもかかわらず、ゆったりと身を任すことのできる心のオアシスとなった。また、ザンドラヒサの笑い声、リサの屈託のない笑顔、サンティのきれいな瞳がとても印象的なホームステイであった。日本でホームステイをする青年の心境が幾分かでも理解できたように思う。

プログラムも中盤を過ぎた頃、ジョクジャカルタの王宮で私が「どうしてインドネシアの人はゆっくり歩くのですか？」と質問すると、すかさずインドネシア青年は「どうして日本人は急いで歩くんですか？」との返答。私たちは答えに窮し、笑って済ませる。

ジョクジャカルタの夜、食事を終えホテルのカフェバーでみんなで和気あいあいと雑談をしている時に“スキヤキソング”が流れた。感慨にふけっていると、どういうわけかカフェバーの専属歌手が私に急に歌わないかと言ってきた。今まで酒が入っていても歌だけは極力断ってきたのに、歌ってみたいという欲求に負け、ありのままよいと思い、気持ちよく歌うことができた。歌い終わるとインドネシアの人、金髪の人、同席のみんなからたくさんの拍手。調子に乗って“心の友”（五輪真弓の歌でインドネシアで人気のある歌）を羽鳥さんと歌い、途中からはムリさんも加わり3人で歌ってしまった。短い時間であったが、深い心地良さをしみじみと味わえた、異国での貴重なひとときであった。

その夜、何か自分が穏やかな風となり、人、大地、時を揺らぎながら流れているような感覚を覚え、ふと「人は風となる」のフレーズが脳裏に浮かび夜中の3時頃に突然目がさめた。再び眠りにつく。

早朝5時頃、暗がりの中から徐々に澄みわたる水色の空に、ヤシの木が浮かび上がる。前日約束していた羽鳥氏を誘い、早朝のジャランジャランに行く。私はジャカルタでは、歩道を通る人や、たむろしている人には極力目を合わさないようにしていた。しかし今回は、朝食のために屋台の周りに子連れなどの夫婦（もしくは祖父母）がなごやかに集まっているところで「スラムッパギ（おはよう）」というみんな一様に微笑みながら「スラムッパギ」と返してくれる。その後私は、再度ジャカルタに帰った早朝のジャランジャランの途中、路上のバイクのタクシー運転手さんに「スラムッパギ」と言うと、するとあたりにいた同僚を呼び寄せ3人でポーズを取り私にビデオ撮影の催促。また、中華まんじゅうを売っているおじさんをビデオカメラで撮っていると、親切にもその場でその屋台をうれしそうに一回転してくれる。たばこを売っている少年に「スラムッパギ」、少し照れ

くさそうに微笑んでくれる。人なつっこさに何か一体感を感じる。

ジョクジャカルタで最初から最後まで私たちについてくれたデフさん。屈託のない笑い顔と、大きな笑い声が今でも近くから聞こえそうである。昼は大学、夜はNGOで働き毎日2時間しか寝ていない勤労大学生。ただし学校でしっかり寝ているみたいではあるが…。たまたま私も前日2時間しか睡眠をとってなかったことから、双方「2時間2時間」と事あるごとに言い合い共に笑い大変心地よい印象を受けた。何か日本人が忘れつつある素直さ、国を憂える心、けっして急がずゆったりとした気分で時を歩み、ものの本質をみることのできるであろう心のゆとり、そしてこのような青年たちがこれからのインドネシアを背負っていくことの期待と安心感。今回私たちを温かく迎えてくれたインドネシアの素晴らしさを感じずにはいられなかった。

このようにいろいろな方と出会い、語り、あっという間に今回のプログラムが終わり、最後はヌルマさんとディニさんが空港まで見送ってくれるなか、多くの友達そして再びこの地を訪れるとの約束をインドネシアに残して日本に発つ。

インドネシアから帰った翌朝、インドネシアで毎朝していたジャランジャラン（散歩）でもと思いつき、1歳の次男を連れて家から出てみると、庭のモミジが今までになく色鮮やかに紅葉していた。インドネシアでの思い出と重なり、何か心に染み渡るものを感じるとともに、我が家に帰ったという心地よい安堵感を覚える。今後、今回の貴重な体験を糧として、鮮やかにいつまでもお互いの心に残る交流を、広げていきたいとして私の今回の所感のまとめとしたいと思う。

最後に、96年インドネシア経済Bの地方プログラムと一緒に取り組んだ島根県国際交流青友会大田ブロックのメンバーおよびホストファミリーの方々、偶然にも今回の派遣で一緒になった4人のメンバー、そしてインドネシアから帰って来た時長男が急きょ入院している病室で、「どうだったかね」と笑顔で迎えてくれた妻に感謝したい。

トゥリマカシ（ありがとう）。

ロ。「太陽は赤いか黄色か」

齋藤 渉

赤道を英語で書くとequatorであるのはご存じのとおり。語源は、equal（等しい）と同じで、北極・南極からの等距離の点（線）というような意味あいであろう。ここには、地理的な意味はあってもあまり情緒的な色彩はない。

インドネシアは、赤道直下に位置する。しかし、そこはequalではなく、「南」と呼ばれている。地理的に見ると、現在陸地は北半球に集中しており、陸地の南北中間点といえ、中国やインドから南側、いわゆる「南」と呼ばれる地域になるとも言えるだろう（当然本来の意味は違うだろうし、さらにオーストラリアは「南」なのかなんて経済的な話も置いておこう）。いずれにせよ、日本は一番「南」に近い「北」の国となるわけだ。

ただし、「南」の国はお休みに最適な楽園ではなかった。首都ジャカルタ。市中を縦横に走るメインストリートは、耐えきれないほどの交通量を抱え込み、道の両側に立ち並ぶビル群は日本になんら劣らない。しかし、道路一本隔てただけで、屋台や掘っ建て小屋、舗装の不十分な道路が目の前に現れる。この国は様々な歪みを抱えながらも、力強く立ち上がり、今「北」をめざし邁進しているようだ。ここには、日本が忘れかけている情熱がまだ残っている。そうした色メガネを通してみると、朝から晩まで路上で新聞を配る少年にも野心が見え隠れしているようにすら思えてくるから不思議だ。

都市の景観は、以上のようなものだが、そこから1時間も車で移動すれば、そこは、小さな瓦屋根の家が点在するだけの農村風景へと一変する。各所に点在するヤシの木を除けば、水田や木々は日本で見るものとそう変わらない(もっと奥地だとどうかは知らないが)。地平に沈んでいく夕陽などは、日本で見る趣と全く同じと言ってもよいだろう。

人々はどうかだろうか。ホームステイ先での朝、私より少し年上の男性(一家の義兄)が、“Let It Be”や“I Just Call To Say I Love You”をエレクトーンで演奏していた。そして、私がまだ寝ている間に、テニスをしていたらしく、弟は汗だくだ。私の接した人々は、同窓会の人もホームステイ先の家族も、みなこの国の上流階級に属する人たちなのだろう。なかなか知的で優雅な人たちである。彼らの知的な好奇心は、個人的に親近感を覚えるとともに、会話を楽しくしてくれる。また、お会いした人全員が日本に親近感を持っていてくれるらしいことも、言葉の端々、態度から感じることができる。こういった点は、様々な人種を有する国だが、人種にかかわらずみなに共通して感じたことの一つだ。

年6~7%ほどの高度経済成長のまっただ中にある国(特に都市部)は、彼らの上昇志向や飽くなき知的な好奇心に裏付けられているのだろうか。彼らの穏やかな優雅さと、高速であるがゆえに様々な歪みを生み出す経済成長とが、私の頭の中でつなげることができないのは、私のインドネシア理解の浅薄さがゆえだろうか。

都市の景観、自然、人々。このたびのインドネシア滞在のおかげで、日本がアジアの一員であることを実感できた。個人的にはそれだけで満足している。そして、日本が本当にアジアの一員として、「北」上してくる「南」の国を受け入れ、equalにならなければならない時期なのだと感じた。アジアのなかでほぼ唯一の先進国、日本。「南」に一番近くあるはずの国。私たちが、それを実現していくためにも、より深くお互いを理解していくことが必要となるだろう。

赤道の「赤」は太陽を表している。つまり、赤道とは「太陽の道」という意味だ。春分・秋分のとき、太陽がちょうど真上にくる地点という少々天文学的な、そして、赤という色で表現することでやや情緒的な色彩を帯びた言葉である。

日の丸でも使われるように、太陽を赤いと表現することは、日本では当たり前のことだ。しかし、西欧では子供の絵画の中ですら太陽は黄色く描かれるそうである。白昼の太陽は、確かに黄色かもしれない。日本の太陽は感覚的に感じるものであり、恐らくは、感傷的な夕陽の色が太陽を象徴しているのだろう(こういった点からも、どうも西欧の方々とは、気持ちを分かち合えない部分があるように感じる)。

インドネシア語で太陽は、Matahari(日の目)。一日を見つめる目というようなニュアンスなのだろうか。どうだ、ちょっとセンチな言葉ではないか。私がインドネシアで見た夕陽は、日本で見たのと同じちょっとセンチな「赤」だった。はたしてインドネシアの人々は、日本人と同じく太陽を赤いと感じているのだろうか。

※これまで一般的なインドネシアに対する感想を述べたが、もう一つそれとは別に、アフターケア調査そのものに対する所感を短く述べたい。

KAPPIJAにせよSEKKABにせよ、提言であったり、苦言であったり、感想であったりをいろいろとぶつけてくる。様々な組織等を視察し、話を聞くにつれ、彼らの熱意から、本アフターケア調査の重要性を再認識するに至った。

しかし、私は本調査団の一員ではあるが、一民間企業の従業員に過ぎない。実際のところ、私にできることは、ボランティア的な自主活動（それも現在の実生活から照らすと恒常的な活動は難しいと思う）とこの報告書を書くことだけである。そうした思いも込めて、この報告書、特に提言に関しては、彼らの意見と私たちの思うところを精いっぱい書かせていただいた。

基本的に私は責任も、したがって権限も持っていない。これを書き終えれば無罪放免。そのような人間が、彼らの真剣な話を聞き取り、一人前に意見してよいか、と常に疑問を持っていた。画一的なメンバーでは、画一的な意見しか出てこない。違った見方の意見も必要であろう。私はそういう要員であったのだろうか。

御託はさておき、私個人と10日間も仕事をほったらかすことを許してくれた会社とのために、企業人として、今後、この経験とコネクションを活かしていこうと思う。

八、「二つ目の10日間～インドネシアが私に教えてくれたこと」 黒谷 幸世

96年6月に初めてJICAの青年招へい事業地方プログラムを担当するという機会を得て、とてもいい経験をさせていただいた。約10日間をインドネシア青年に同行し、彼らの積極性に感動し、また、その人なつっこさにインドネシアという国を身近に感じたものだ。そして今回のアフターケアプログラムでは、インドネシアで彼らに再び会うことができるといって胸を躍らせていた。結果的には、私たちが日本で会った青年には3人にしか再会できなかったが、新しい出会いがあり、ホームステイなどとても貴重な経験ができた。

私のホームステイ先は、広いテラスのついた2階建ての家で、お父さんは保険会社に勤めていて、休日でも仕事の電話がよく鳴る忙しい人だった。洋風のこの家にはお手伝いさん2人を含め9人が住んでいた。私のイメージするインドネシアの大家族だった。インドネシアの人々は一般的に日本人以上に社交辞令が多く、態度があいまいであるとJICAの方から聞いていたが、私のホストファミリーは例外であつたらしくアメリカに行った経験もある、欧米的な考え方の家族であつた。

生活のパターンは、やはりイスラム教のお祈りのためか早起きで、17歳の女の子（インディア）と同室だった私は、朝5時30分起床、ゆっくりとインドネシアティーを飲み、7時から学校が始まるインディアを見送ってから市内散歩（マーケットやタマン・ミニなど）へと連れて行ってもらった。

この国に来て一番初めに感じたことだが、ジャカルタ市内の交通事情は予想していた以上にひどく、車の数が多いのは東京並みとしても割り込み運転などマナーの悪さと渋滞が目についた。日本の田舎でしか運転したことのない私には、とてもジャカルタでは運転する自信はない。ポゴールの植物園へ行くにも行きは1時間かかり、帰りは2時間半を要した。ジャカルタに着いた日、インドネシア人の友人に「あなたの家はここからどのくらいかかるのか」と聞いたら、「早くて40分、遅いと2時間」と答えたことを思い出した。

それにしてもインドネシア人の気質というか、どんな時にもゆったりと構えて少々のことには動じることなくマイペースであり、車の渋滞や雨期のどしゃ降りのような悪条件のもとでもそののんびりさは変わることがなかった。私などは、熱帯の暑さの中、大雨で車の窓は閉めなくてはならないがクーラーはこわれているという状況に、頭はクラクラし、「このような冬も秋も春もない土地で長く暮らすことは無理だろう」とギブアップしかけ

ているのに、ホストファミリーはといえば、こういう時にこそとジョークに輪がかかる。つい何日前までの日本での生活に比べるとなんと人間的な生活であろうかと思う。

インドネシア人は、宗教が精神のよりどころであるという。仕事やその他社会のしがらみは、その人の一番重要な信念に影響を与えることはない。尋ねられれば、「仏教徒です」と答える私は、仏教も自分の信念も軽く見ているような後ろめたい気がした。宗教の自由も宗教を持たない自由もある日本人の私としては、宗教だけが精神のよりどころであるとは考えないが、日々の仕事や社会に流されない何かが自分に足りないものだと感じた。

この10日間はアジアに行くのが初めてだった私にとっていろいろなことを気付かせてくれる旅だった。ホストファミリーをはじめ、KAPPIJAのメンバーの方々にお世話になり、そのホスピタリティーに感動した。また、6月に島根に来た青年の気持ちが少し分かったようでうれしかった。インドネシアは人も風景もやさしく、大雨の中訪れたポロブドゥール寺院の美しさもいつまでも心に残るだろう。このプログラムにかかわりを持たれたすべての方々、またアフターケアメンバーのみんなに感謝し、この経験を今後の国際交流活動に活かしていきたいと思う。

二、「インドネシアについて思うことと青年招へい事業への希望」 羽鳥 剛

私のインドネシア訪問はこれで2回目である。前回は観光と帰国青年に会うことを目的に訪問した。前回の訪問ではいろいろな観光名所を見ることはできたが、今回のアフターケアでは通常行けないようなところを数多く見ることができ、非常にうれしく思っている。加えて、数多くの友人に再会できたことも大きな喜びの一つである。

さて、まずは今回の訪問で感じたインドネシアという国についての所感を述べることにする。

第一に、教育水準が高いと感じた。最初の訪問先となったパンチョラン第一小学校では、4～5年生あたりから英語の授業をやっているというのを聞き、非常に驚いた。次に訪問した中学校・高等学校でも、LL教室で質の高い英語の授業をやっていた。友達の家遊びに行った時、中学1年生か小学校6年生くらいの女の子から英語でいろいろ日本について質問されたが、話す英語はもとより、質問についても高度な質問で、説明になかなか苦慮した時もあった。

次に、ジャカルタの町並みをみて感じたことであるが、まず思ったのは東京の町並みとんなら変わらないことである。東京都庁のような建物、新宿タイムズスクエアのような大きなショッピングセンター、大きなホテル、多くの銀行が立ち並ぶ風景は東京そのものである。しかし、大通りから一步外れるとそこには未整備の道路が続いていた。急激な経済発展を遂げる一方、追いついていないインフラ未整備が実在していた。道路の舗装のみならず、下水道の未整備（もちろん下水道は設置されているが、急激な排水に対応できないという意味）という点についてもジョクジャカルタで目の当たりにした洪水で百聞が一見にて理解された。インドネシアの発展を願っている一人として、同国に対するより一層の技術協力支援をお願いしたいと考える。

私の今後のインドネシアとの付き合い方について述べてみる。青年招へい事業に参加し始めたのは4年前の平成4年度からで、その時初めて参加したのがインドネシアであった。初めてインドネシアの人々と触れ合ってみて、なんて温かい人々であろうと感じ、好きになり、それからことあるごとにインドネシアを見てきた。昨年からはインドネシア語も勉

強し始めた。私の最終目標は彼らと共通の言語でお互いの国の問題点やその他いろいろなことについて自由に話をするることである。それまでは片言ながらも手紙、E-mailなどで徐々に交流していきたいと考えている。

最後に今回の調査で感じたことを述べたい。まずは、この青年招へい事業には本当にいろいろな問題があるということを感じた。今まではただ単に参加してきただけであり、プログラムの改善などは全く頭になかった。自分が参加して実際に見てきたプログラムが大変に素晴らしいものであったからである。しかし今回の調査で、その根底にはいろいろな問題があり、表面上良いプログラムと映るのは関係者の方々の多大な努力によるものであったのだ、ということを感じた。技術協力分野でたまに耳にする「援助疲れ」という言葉を青年招へい事業では使われることのないようにするためにも、また、この青年招へい事業を今後永く続けていくようにするためにも、今回の調査をもとに、プログラムの改善がなされることを願っている。

ホ. 「ビッグ・ファミリー」

錦戸 和子

インドネシアの生活環境について全く想像がつかなかったこともあり、不安と期待でいっぱいだったホームステイについて書こうと思う。

ホームステイ先でまず私を迎えてくれたのは、クラクションを鳴らすとメイドがすばやく走って開けに来る大きな門であった。その中にはこの程度で驚くなよと言わんばかりに自慢げな（立派な）、広くてきれいな家が建っている。ドアが開くと温かい笑顔でホストファミリーが私を待っていてくれた。この笑顔で私の不安が一挙に消えていった。父親は不在であったが、私宛ての手紙を残してくれていた。手紙を残すとは、きっと出張か何かで家に戻れなくなったのだろうと想像し、勝手に残念がりながら手紙を読んでみると、どうやら思い過ごしである。「仕事の都合で遅くはなるが必ず帰宅するので、家族と楽しいときを過ごしてほしい」といった内容が、2ページにわたり書かれていた。まだ顔も見えない日本からの訪問者をこんなにも歓迎してくれていることに感動した。

父親のムスタファ氏は、保険会社の重役であり、仕事で4回も来日しているらしい。母親は大変明るい性格で、家全体を楽しく盛り上げている。お子さんは4人。特に長男が英語学習に力を入れており、私に積極的に話しかけてくれるのがうれしかった（私は自分の語学力の限界を感じると同時に、「案外通じるな」とも思った）。前述の家族6人と姪1人、母親の弟、メイド4人の大家族である。

父親の帰りを待つかわら、母親、子供たちとの夕食が始まった。食卓に並べられたカレーや野菜炒め、焼き魚などなど小皿の種類が多いことに驚いた。そしてインドネシア語と日本語で、食べ物の名前は何と言うかなど話題で話が弾み、2時間近くも話し続けた。そうこうしているうちに、ムスタファ氏が帰宅。笑顔で私と握手を交わした。彼は想像した以上に貫禄のある人物であったので、初めは緊張してしまった。しかし、彼は日本に非常に興味を持っており、たくさんを知っていた。歌舞伎をまねたり、「上を向いて歩こう」を熱唱したりと、まるで俳優のようにいろいろなパフォーマンスを演じてくれるという、ユニークな面も見せてくれた。そして、気がつく私の緊張感はずっかりどこかへ行ってしまっていた。

私がお世話になったのは、金・土・日と週末であったので、ムスタファ家の普段の週末を家族と一緒に味わうことができた。土曜日の昼間は子供たちを学校に送り出してから、

家の中でのんびりとした時間を過ごした。庭には蓮の花が咲き、鯉が泳いでいる池があり、庭全体の手入れが行き届いている。朝になると、インコなどムスタファ家で飼っている5羽の鳥たちが、一斉に騒ぎ出す。冗談半分で話しかければ、「ハロー」と返事をするオウムもいる。つい面白くなりしばらく立ち止まってからかったりした。時の流れる速度が日本とは違うのではないかと感じるほど、ゆっくりと時間が過ぎていく。しかし、ムスタファ氏だけは、家族の中で特別。月～金曜日は夜遅くまで働いているらしい。こんなゆっくりとした時間が過ごせるのは週末だけのようだ。休みの日に家でゴロゴロしている日本のお父さんとどこか似ている。

夜になると、父親の両親と兄弟の子供たち（甥・姪）が訪ねてきた。ついに「家族」は20人を超え、ますます明るい雰囲気になる。父親が、はしゃいでいる私をみて「ビッグ・ファミリー」と言ったので、私もその言葉を繰り返す。「ビッグ・ファミリー」

次の日の日曜日には、兄弟姉妹の家へ3台の車を連ねて出かけた。甥や姪たちの年齢は様々だ。ある時は、ドラえものの歌の大合唱、またある時は、勉強・仕事・恋愛について語り合ったりした。こんな短時間に、これほど多くの人と接することができる機会は、日本に戻ったらまずないだろう。話が盛り上がれば盛り上がるほどますます感激が増していくように思えた。ムスタファ氏が、何度も私に「ビッグ・ファミリー」と叫ぶ。きっと自分の家族が、日本から来た私と親しく触れ合うのを見てうれしかったのだろう。

彼の言う「ビッグ・ファミリー」というこの言葉は、最初、私に対しての自慢にしか聞こえなかった。それはきっと、私がホストファミリーを羨ましく思ったからだと思う。しかし、3日間、いつも多くの人に囲まれ生活をしているうちに、その言葉の持つ温かみに気がついてきた。今では、氏の言葉は、私が加わりさらに賑やかになった大家族に対するうれしい悲鳴だったのだと、勝手に思い込んでいる…。

最後になったが、週末の3日間を、単なる訪問者としてでなく、家族の一員として受け入れてくださったホストファミリーに心から感謝したい。そして、ほんの10日間だけではあったが、私を温かく迎えてくれたインドネシアという国・人々にも同じ気持ちを伝えたい。

(3) 提言

イ. 滞日プログラムに対する意見(1) (インドネシア青年からの提言1)

①問題点：経済グループへの参加者に、現行の滞日プログラムに対する不満を持つ者が多い。

[具体的な個々の意見]

- ・工場見学などは在インドネシア日系企業等などでも見学可能であり、不要である（もっと経営の根幹に触れる視察などを実施してほしい）。
- ・文化遺産などを見学するプログラムが多過ぎる。
- ・経済グループの参加者の多くは、将来インドネシアにおいて、中核的な企業を経営すること、あるいは商工業関連の省庁において指導的立場に立つことを目標としている。現行のプログラムは、彼らの希望を完全に包含するものではない。

②問題点の原因または理由

- ・青年招へい事業の目的には、日本について全般的に理解してもらうことも含まれている。また、「経済」というテーマでは、環境・教員等に比べて個人の希望も多様

となり、すべての希望に応えることは困難である。

③改善のための具体的な方策

- ・ インドネシア国内で青年を募集する際に、事前に経済一辺倒のプログラムではないことを、よく説明する。あるいは、「経済A・B」という抽象的な名称を廃し、より具体的な名称にする。
- ・ KAPPIJA 等が既参加者を対象にアンケートや聴き取りを実施し、その集計結果、集約意見を日本のプログラム作成者に早期に提示する(特に前年度参加者の集約意見)。それを受け、日本側は可能な限り希望に沿った形にプログラム内容の改善を行う。

ロ. 滞日プログラムに対する意見(2) (インドネシア青年からの提言 2)

①問題点: 日本滞在中のプログラムにお祈りの時間がない

- ・ お祈り等を行う時間がほしい。

②問題点の原因または理由

- ・ 日本のプログラムがかなり制約を受けることになる。
- ・ インドネシア青年も複数の宗教を持ち、設定の仕方が難しい。

③改善のための具体的な方策

- ・ 相手国の生活スタイル(宗教)を理解することが、日本側にも必要と考える。全日程とは言わないが、できる限り(1日でもよい)日程に組み込む。いずれにせよ、事前にかなり双方の情報交換が必要であろう。

ハ. アフターケア調査について

①問題点: 訪問・視察先の事前情報

- ・ 青年活動等の視察先組織についての事前情報が不十分であり、その活動内容等の基本的な事項の聴き取りに時間を取られることが多い。そのため、本質的な疑問や意見交換を行う時間が少なくなってしまった。

②問題点の原因または理由

- ・ 訪問先で通訳がない場合も多い。訪問先では必ずしも英語が通じるわけではない。そのため言語上の問題で、正確な意思の疎通が予想以上に困難となるケースがある(双方が同一の言語を理解できれば、時間の短縮は可能)。
- ・ 一つの視察ポイントに割ける時間が少ない。

③改善のための具体的な方策

- ・ (KAPPIJA 等のプログラム設定をしている組織への提案) 基本的な事項や、視察先組織での青年の活躍状況などを英文で説明した資料を、事前に配布してほしい。そうすれば、言語上の問題があっても、訪問・視察においてははじめから本質的な意見交換が行える。
- ・ 通訳その他の点も考慮したプログラム設定を行う。

ニ. プログラムの設定時期について (SEKKAB からの提言)

①問題点: 年度当初の青年招へい事業の募集期間が短い

- ・ 「経済A・B」などの招へい人数の多いプログラムが年度当初に計画されているが、

それらに対する募集期間が短いため、募集・選考等の事務が圧迫される。

②問題点の原因または理由

- 日本側の計画が年度ごとであり、年度当初の陣までの募集期間は、後半のプログラムに比べてどうしても短くなる。

③改善のための具体的な方策

- 年度当初には、募集人数の少ないプログラムを実施し、全体として年度後半に実施時期の重点を移す。